日本音楽集団
PRO MUSICA NIPPONIA

PRO MUSICA NIPPONIA

第173回定期演奏会
The 173rd Regular Concert

第一生命ホールオープン2周年記念

「オイディプス王」より

音楽劇「砂漠に消えた王」
〈The King disappeared into the desert〉

2003年11月15日［土］
午後2時開演
第一生命ホール

：主催：特定非営利活動法人日本音楽集団
NPOトリトン・アーツ・ネットワーク／第一生命ホール
：協力：劇団民藝
：助成：平成15年度文化庁芸術団体重点支援事業
財団法人Asahiアサヒビール芸術文化財団
財団法人朝日新聞文化財団
財団法人三菱信託芸術文化財団

文化庁
AGENCY FOR CULTURAL AFFAIRS

■ 日本音楽集団：http://www.promusica.or.jp/　http://www.wahoo-net.com/promusica/
E-mail office@promusica.or.jp
■ トリトン・アーツ・ネットワーク：http://www.triton-arts.net

ごあいさつ

39年目の巡り合わせ

日本音楽集団代表　田村拓男

第1回目の定期演奏会が1964年（東京オリンピック年）11月17日に日比谷第一生命ホールで開かれて以来、39年目の本日、新装オープンして2年目の記念日に私たちの第173回目の定期演奏会が開かれるという巡り合わせに何とも言えない喜びを感じています。

NPOトリトン・アーツ・ネットワーク（略称TAN）は民間施設の第一生命ホールを舞台に「芸術活動」や隣接地域への「コミュニティ活動」などの自主企画公演を積極的に行っており、一方、音楽団体として全国で最初のNPOの認証を受けた日本音楽集団は、昨年度より文化庁の重点支援事業を受けることになったのを契機にTANへの協力を要請。日本音楽集団の春・秋の定期演奏会はNPOトリトン・アーツ・ネットワーク／第一生命ホール共催という形で行えることになりました。

今回、稲垣隆史氏をはじめとする劇団民藝の名優の皆さんとの共演により誕生する音楽劇「砂漠に消えた王」の大型新作に胸をときめかせています。皆さま方のご理解とご支援を賜りますようお願いいたします。

二周年を迎えて

特定非営利活動法人 トリトン・アーツ・ネットワーク理事長　加茂文治

“新生”第一生命ホールオープン2周年記念公演にご来場いただきまして誠にありがとうございます。

戦後間もなくお堀端に産声を上げた“先代”第一生命ホールは、音楽のみならず、演劇・舞踊・映画・落語と幅広いジャンルで東京における芸術・文化の発展に寄与してきました。

本日の公演は、音楽と演劇という、まさにジャンルを超えた芸術文化のコラボレーションであり、“新生”ホールオープン2周年を祝うに大変相応しい企画であります。

また、私共トリトン・アーツ・ネットワークが特定非営利活動法人（NPO）として2001年に始動して以来、第一生命ホールでの「芸術活動」と地元中央区に密着した「コミュニティ活動」を大きな二本の柱とした今日までの活動について、おかげさまで皆様からもご評価いただけるところまで漕ぎつけることができました。今後も、TANは“先代”ホールで培われてきた精神と伝統に敬意を払いつつ、TANのミッションである「音楽を通して人間の輪を広げる」活動をより一層推進して行く所存であります。

最後になりますが、本日の公演の開催にあたりご協力をいただきました皆様に心より御礼を申し上げますとともに、引続きご支援を賜りますようお願い申し上げます。

「砂漠に消えた王」上演によせて

劇団民藝　稲垣隆史

コロスは古典ギリシャ劇の中で、人物の内面を解き明かし感情を増幅し、時には観客の思いを表現する言わば華とも言うべき存在だと認識しておりましたが、台本作者は「たった四人でそんな手妻遣いみたいな事が出来る訳が無いから殺す」のだと言い放ったのでした。かくて初演はその華が欠けておりましたが、今回日本音楽集団という素晴らしいコロスを得て再び甦ろうとしております。人間の尊厳というものを謳い上げたこのソフォクレスの名作は、昨今の不穏な世界情勢を生む要因の一つである「神が示した通りに生きねばならぬ」の衝突、人間が定めた正義とは?等色々考えさせられる問題を孕んだ作品ではないでしょうか?

今回の公演を主催して頂いた日本音楽集団、トリトン・アーツ・ネットワーク、企画、制作に奔走された西川浩平氏はもとより、助成を仰ぎました各種団体の方々並びに、我が劇団民藝の仲間に対しまして衷心より厚くお礼申し上げる次第でございます。

――― 「オイディプス王」より　音楽劇「砂漠に消えた王」 ―――

キャスト（一人二役）

稲垣 隆史　オイディプス・語り手
岡橋 和彦　テイレシアス・使者
加藤 正人　クレオン・羊飼い
戸谷 友　　イオカステ・女

作　曲　　日本音楽集団／第一幕前半 秋岸寛久　後半 福嶋頼秀
　　第二幕前半 真鍋尚之　後半 川崎絵都夫

企画・構成　西川 浩平

作	ソフォクレス	美　術	勝野 英雄
台　本	関根 詳記	照　明	尾藤 俊治
演　出	稲垣 隆史	音　響	岩田 直行

演奏者

[笛]	[胡弓]	[琵琶]		[打楽器]
越智 成人	多々良香保里	首藤久美子	田村 法子	尾崎 太一
[尺八]	[三味線]	田原 順子	早川 智子	多田 恵子
砂川 憲和	杵家 七三	[箏]	久本 桂子	望月太喜之丞
添川 浩史	工藤 哲子	久東 寿子	丸岡 映美	若月 宣宏
原郷 隆	穂積 大志	桜井 智永	山田 明美	
渡辺 淳	簑田 司郎	城ケ崎美保	山田 由紀	[指揮]
		高橋はるな	吉村 七重	田村 拓男

「作品について」

西川 浩平

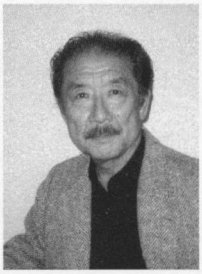
“ギリシャ悲劇「オイディプス王」を音楽集団の定期公演で上演する”　この企画に「日本の楽器とギリシャ劇が、はたして合うのですか?」という多くの質問を頂いた。実は音楽集団の作曲家達は「邦楽器でギリシャ劇を作る」という部分ではあまり抵抗は無く、むしろ「音」そのものが、作曲者に自然に浮かんで来ていたようであった。日本の楽器それぞれが、世界的に見ても大変古い時代の形を残し今に伝えている事実が、近代的に改良された西洋の楽器よりも、むしろ古代の芝居の音作りに意欲を湧かせたのであろう。本公演では、琵琶や胡弓のように、音色や奏法が非常に日本的であり、合奏に溶け込む事が比較的難しい存在と思われる楽器たちも、ものの見事に芝居との調和を見せているのは、その「時代の響き」というものかもしれない。

「オイディプス王」と同じくギリシャ語で書かれた「新約聖書」も、それこそ世界中の国々の言語によって翻訳され浸透している。1973年、キリストとイスカリオテのユダをテーマにしたミュージカル「ジーザス・クライスト・スーパースター」が上演された。キリストの生涯をロックの音楽で表現するということに衝撃と反響を呼んだが、それは奇を衒った事ではなく、むしろ若者たちのごく自然な表現だった。これももはやキリスト教と教会音楽という固定観念から離れた、湧き出ずる想いに他ならない。音楽集団は、主題がギリシャ悲劇であれ、ただ自分達の音楽、楽器を奏でるのみである。

作品を作り上げていく上で、問題が無かった訳ではない。作曲者にとっても演奏者にとっても“音楽集団全体で音作りをする”という前提が作業を困難なものにしていった。現在、一般的な舞台作りは、舞台演出が在って、セットが決定し、音楽の時間的な配分が決定し、そこで作曲者に依頼、スコアーからパート譜が準備され、やっと演奏者の手にゆだねられる。そして多くの場合、それは本番の直前になる。それはこの形が一番効率的だからに他ならない。

しかしこの流れ作業では共に作り上げていった事にはならず、今回は大前提として“一番始めから音楽集団で作り上げていく”との方針を決めた。団員と俳優の方々と共に相談しながら“ここの部分はこんな音がほしい”“こんな音ではどうだろう”と膝を交え、一年半ほど前から原案を作り上げていった。それを基に4人の音楽集団の作曲家に担当して貰い、専門家の視点から音楽的な配慮を加え、又合奏部分を書き下ろして貰った。いわば音の原案作りの部分を縦糸として全体的な筋を通し、作曲家達が横糸として音楽を完成させている。音楽集団全体と演じ手との共同作業となるのは、この作り上げていった過程に在る。これが多くの非効率的な作業を生んだ事は事実である。しかし“舞台を全員で作っていく”という原点に臨んだ事が、より強い訴えとなる筈である。

キャストプロフィール



稲垣隆史

［オイディプス］・［語り手］

俳優座養成所卒業後劇団民藝に入団、宇野重吉演出「檻」でデビュー。
主な出演作は「終末の刻」の山田右衛門作、「どん底」の役者、「炎の人ゴッホ」のロートレック、「第二次大戦のシュベイク」のヒトラー、「るつぼ」のヘイル牧師、「セールスマンの死」のハッピー、その他メキシコ演劇祭に招かれ「山椒太夫」の厨子王を演じ南米を巡演、スエーデン大使館主催のストリンドベリーフェスティバルでスエーデンの国民的作家ストリンドベリーの孤独と、別れを九曲の歌とモノローグで綴る一人芝居「糞ったれ!!」を上演。また、日本音楽集団には数多く語り手として客演、「竹取物語」「八郎物語」「百物語」に出演。

岡橋和彦

［テイレシアス］・［使者］
劇団民藝所属
主な舞台に「アンネの日記」のデュッセル、ファンダーン、「三年寝太郎」の勘太、「子午線の祀り」の景清。現在劇団活動と並行して全国各地で原文による「平家物語」を語っている。

加藤正人

［クレオン］・［羊飼い］
元劇団民藝に所属、現在フリー
主な舞台に「アンネの日記」のペーター、「終末の刻」の久作、「大桜剣劇団」の小桜半一、「怒りのぶどう」のアル・ジョード、「炎の人ゴッホ」のデニス。

戸谷 友

［イオカステ］・［女］
劇団民藝所属
主な舞台に「炎の人ゴッホ」のシーン、「セールスマンの死」のフォーサイス嬢、「エレジー」の塩子、「アンネの日記」のファンダーン夫人、「研師源六」のおらく、「遥かなる虹へ」の吉岡美里。

作曲者プロフィール

秋岸寛久

1962年横浜市生まれ。東京音楽大学卒。作曲を助川敏弥、浦田健次郎、三木稔の各氏に師事。卒業時の作品「三味線協奏曲」は仙台フィル及び日本フィルの定期演奏会、アメリカ公演等で演奏される。日本フィル九州公演20周年委嘱作品「交響連詩〈九州〉」（和田薫氏と連作）、横浜国大グリークラブの創部50周年委嘱作品「樹木頌」、NHK邦楽技能者育成会45期委嘱作品「往来」などを手掛ける。

福嶋頼秀

1967年前橋市生まれ。慶應大学法学部卒。東京フィル、日本フィル、東京都響、オーケストラ・アンサンブル金沢、フランツ・リスト室内管（ルーマニア）等からの編曲依頼等多数。現田茂夫、足立さつき、錦織健、佐野成宏、古川展生の各氏等が演奏。2003年チョン・ミョンフン監修・指揮のコンサートの企画・編曲を担当。邦楽、教育、イベント分野の作編曲多数。土曜ワイド劇場、月曜ドラマスペシャル、ニュースステーションのジングル等の音楽も担当。

真鍋尚之

1971年横浜市生まれ。洗足学園大学卒業（作曲・声楽専攻）、東京芸術大学邦楽科雅楽専攻卒業。第18回神奈川県合唱曲作曲コンクール、1位なし2位。第1回国立劇場作曲コンクール優秀賞（1位）受賞。第4回JILA音楽コンクール邦楽部門2位など作曲及び演奏での受賞多数。2000年、01年、03年に笙リサイタル開催。小野雅楽会、十二音会会員。

川崎絵都夫

1959年東京生まれ。魚座。A型。作曲を松村禎三、石桁真礼生、永富正之の各氏に師事。東京芸術大学音楽学部作曲科卒業後、東京交響楽団や坂本龍一のオーケストレーターを経て、委嘱作品の発表を始める。また、文学座、新橋演舞場、新国立劇場を始めとした舞台音楽も多数手掛ける。オーケストラ、合唱、邦楽器、シンセサイザーによる音楽制作等、幅広く活動。現在日本作曲家協議会会員。早稲田大学文学部講師。東京ミュージック&メディアアーツ尚美特別講師。

日本音楽集団第27次海外公演《エクアドル》の報告

《エクアドル公演記・・・それは初めての体験ばかりであった!》

“赤道”という意味を国名に持つ南米の国、エクアドル。その首都キト市は、標高2,850メートルの高地に位置し、高山病にかかる人が多いと助言されていました。本を調べると、高山病にかからないためには、あまり激しく呼吸をしない事、首を振ったりしない事とあります。「エーッ! じゃー、尺八吹きはどうやって演奏するの?」。今回のエクアドル公演は、音楽集団の過去244回148都市を公演した豊富な演奏旅行体験からさえ、中々予測する事が難しい旅行となったのでした。

赤道記念碑の前で赤道をまたぐ

《イグアナの微笑みに迎えられ》

1996年、音楽集団第143回定期公演にて初演された、エクアドル出身の作曲家ディエゴ・ルズリアガ作曲「ダブル・デュオ」(来たる第174定期公演にて再演)が縁で、企画から丸3年の準備を経て実現した公演旅行でした。成田から26時間ほどかけて到着した地は、太平洋側に位置するエクアドル最大の都市、グアヤキル。到着翌日、早速市の中央にある「セミナリオ公園」通称「イグアナ公園」に行ってみます。その小さな公園には放し飼いされた沢山のイグアナ達が、それこそ元気に動き回っているのです。“イヤー、南米に来たのだな”と実感し、我々は“イグアナとツー・ショット、集合写真でハイ・ポーズ”とキャーキャーいって、はしゃいでいました。しかし落ち着いて周りを見回すと、エクアドルの人たちからは、イグアナよりも“キャーキャーいう日本人”の方がよっぽど珍しいのです。街の人たちに、我々は静かに見つめられていたのでした。

《毎回のスタンディング・オベーション》

しかし国は遠く離れていても、コンサートを開いてみるとその距離は全く感じません。グアヤキル近代博物館コンサート・ホールの聴衆からは、スタンディング・オベーションと熱き拍手を受けたのです。作曲家ルズリアガ氏は日本の民族音楽の中に、エクアドルの音楽と同じ種類の音色を持つ篠笛や打楽器を発見して作品に取り入れたのでした。環太平洋として、そこには民族の壮大な広がりを感じます。

エクアドル在住の2人の日本人との出会いは、音楽集団に新たな活動の広がりを導いてくれたものといえます。「バンコ・デ・エクアドル・カメラータ」音楽監督であり、また優秀なヴァイオリニストでもある、タダシ・マエダ氏、そしてマンタ市にて40年、貿易他、幅広い活動をされている井上順八氏。

GoEcuador.com

Home | Tours | eZine | Calendar | Directory | Classifieds | Tour Activities | REGIONS

Index
article
photo
video
MP3
cartoon
editorials
reviews
sports
archives
eco/social action
Ecuador eVillage

Música desde Japón para Ecuador

Por Giovanna Valdivieso

Presentación de la Orquesta Pro Música Nipona en la Corporación Financiera Nacional

SEPTIEMBRE 27, 2003. Cerca de 150 personas asistieron al auditorio Luis Ayora de la Corporación Financiera Nacional (CFN) con curiosidad de descubrir los sonidos milenarios de la cultura japonesa. El concierto fue producido por la Fundación Teatro Bolívar como parte de su lucha para recuperar al teatro de todos consumido por las llamas en años anteriores.

Una larga fila se formaba en el pasillo principal, donde una colección de fotos a gran escala del Teatro Bolívar antes, durante y después del flagelo se exponían en conjunto como síntesis de los 70 años de historia que envuelve a esta joya quiteña. El Teatro Bolívar estaba nuevamente presente aún fuera de su espacio físico. El público poco a poco fue ingresando al auditorio y llenó tímidamente las butacas con un silencio lleno de expectativas.

El Dr. Bernardo Martilla dio como siempre la bienvenida a los presentes recordando la importancia de continuar con las obras a favor del Teatro Bolívar aunque fuera en otros escenarios. Rápidamente dio paso al que sería el anfitrión más carismático y crítico de la noche, Tadashi Maeda, el conocido violinista japonés que desde hace algunos años comparte escenarios quiteños como el mejor de los ecuatorianos y colabora activamente con el proyecto de reconstrucción de la Fundación Teatro Bolívar. Gracias a él, disfrutaríamos esta noche de la **Orquesta Pro Música Nipona** en su primera presentación en Latinoamérica y en Ecuador.

Una luz tenue invitaría al ingreso de un kimono café brillante con pasos ceremoniales hasta el centro de una silla en el escenario. En sus manos, el músico tenía un juego de tubos de madera de diferentes tamaños unidos en forma circular que con la fuerza de sus pulmones elevaban un sonido agudo y lastimero que se perdía en el techo. Era un *Sho*, u órgano de tubos que semejaba a los churos de mar que nuestros indígenas usan para convocar a su tribu.

Luego, 2 músicos igualmente vestidos con un *Fue* (flauta traversa de bambú) y Taiko (percusión – en este caso un tambor) contrastaron el dulce sonido del flautín con el fuerte repique del tambor, presentando la perfección de su arte. Desaparecieron silenciosos y en segundos después, una mujer con un kimono de atardecer en naranja intenso tomó asiento frente a un *Koto* de 20 cuerdas para con sus manos ágiles y llenas de destreza, deslizarse a través de las largas cuerdas dispuestas en una gran caja de madera cuyos sonidos emulaban a un arpa. Finalmente, otro músico entró con su *Shakuhachi* (con sonido similar a nuestra quena) a la par de notas tristes, melancólicas y profundas. Sus ojos cerrados mostraban su inmunidad ante la presencia exterior, centrado en interpretar con su gran flauta de bambú lo mejor de su repertorio.

Desde atrás de los graderíos, la dulzura del Fue volvió a invadirnos y recorrió a todo el público hasta subir nuevamente en escena. Ingreso otra mujer vestida de flor con un precioso kimono en color carmesí y un *Shamisen* (especie de cítara) tocada con una paleta de madera. Llegamos a Japón! Las notas estremecieron los sentidos de todos y nos trasladaron a parajes orientales. Sus rostros serios y solemnes no perdían la profundidad y el sentimiento, este se percibía en el aire. El público rompe en aplausos, la presentación inicial de los músicos había concluido.

Músico interpretando un Sho

Músico tocando un Shakuhachi

Bella mujer japonesa tocando un Shamisen

Orquesta Nipona en escena

マエダさんのプロデュースによるグアヤキルの成功に自信を深め、次なる井上さんの待つマンタ市に向かいます。ロータリー・クラブ主催の400人会場満員のお客さまが、立ち上がって声援を送ってくださいました。

集団のいつもの海外公演では、新旧を含めた日本の音楽を演奏している訳ですが、今回は、当地エクアドルの作曲家の作品がプログラムのメインを飾っています。演奏会は、日本の古典曲がオムニバス形式で演奏され、団内外の作曲家の作品、そしてルズリアガの作品など。「浜辺の歌、花、八木節」などの日本のメロディーと共に、グアヤキル、マンタ、キトとそれぞれの土地の民謡を、マエダ氏の編曲で演奏し、お客さまが共に大合唱するほどの一体感を持ったのでした。まさに相互、音楽交流の形を、お客さまも十分楽しめたのではないかと思います。

《高山病と戦う奏者達》

次はマンタ市から、国内線に乗って40分。いよいよ高地のキト市に入りました。

“ウーッ! 息が吸えない。速く歩けない。頭が痛い”などの症状があらわれます。

リハーサルをしていてもボーッとして集中力も低下しています。そして打楽器奏者は“気圧の関係で、鼓が思うように鳴らない!”事前に色々予測はしていても、実際に体験してみると大変な演奏条件でした。

しかし、そこは公演が始まってみれば集中するもの。ルイ・アヨラ・ホールにて行われた最後の公演もやはりスタンディング・オベーションで熱き拍手を受け、メンバーも十分納得がいった公演で、この旅行を締めくくる事が出来たのでした。

キトのリハーサル風景

《エクアドルとの交流のはじまり》

公演翌日、キト市の公演を主催してくださった、テアトロ・ボリバール総裁、ベルナルド・マンティージャ氏の案内で、4年前火災にあって修復に必死の努力をしている、劇場の現場を視察しました。キト市の旧市街の文化財としても貴重な建築で、最高の響きを誇り、文化の中心的存在であったボリバール劇場は、今は目を覆うばかりの姿をさらけ出していました。全てに物余りの日本と比較し、「せめてその復興への出来る範囲のお手伝いを」と交流の継続を約束しました。

www.teatrobolivar.org

3都市でのエクアドル公演の思い出を胸に残し、音楽における交流を果した喜びと共に、時差の関係で都合3日かかってしまう帰途についたのでした。

グアヤキル近代博物館ホール前にて

【日本音楽集団第27次海外公演プログラム】

プログラムA
第一部
1、笙と箏のためのソナタ／真鍋尚之作曲（笙、箏）
2、去来／杵屋正邦作曲（三味線独奏）
3、美しの都／松尾祐孝作曲（尺八、鼓）
4、芽生え／三木稔作曲（箏独奏）
5、調べ　（笛、打楽器）
第二部
1、アルトゥラス／ディエゴ・ルズリアガ作曲（笛、箏、打楽器、ピアノ）
2、日本のメロディー浜辺の歌、待ちぼうけ、花、八木節（全員）
第三部
1、夕影の詩／三木稔作曲（尺八、三味線、箏）
2、呼吸Ⅱ／真鍋尚之作曲（笙独奏）
3、ダブル・デュオ／ディエゴ・ルズリアガ作曲（笛2、打楽器2）
4、エクアドル・メドレー —Aguacate, Vasija de Barro
／マエダタダシ編曲（全員）

プログラムB
第一部
1、平調調子（笙独奏）
2、祭り（笛、打楽器）
3、みだれ／八橋検校（箏独奏）
4、鈴慕（尺八独奏）
5、歌舞伎音楽より、大薩摩、狂い五段（三味線、笛、打楽器）
第二部
1、アルトゥラス／ディエゴ・ルズリアガ作曲（笛、箏、打楽器、ピアノ）
2、日本のメロディー浜辺の歌、待ちぼうけ、花、八木節（全員）
第三部
1、笙と箏のためのソナタ／真鍋尚之作曲（笙、箏）
2、ダブル・デュオ／ディエゴ・ルズリアガ作曲（笛2、打楽器2）
3、マナビ（Manabi地方民謡）／奈良英子編曲（全員）
4、エクアドル・メドレー —Aguacate, Vasija de Barro
／マエダタダシ編曲（全員）

【日程】
2003年
9月21日（日）成田発
9月23日（火）グアヤキル・ワークショップ／グアヤキル近代博物館コンサート・ホール
9月24日（水）グアヤキル公演（プログラムA）／グアヤキル近代博物館コンサート・ホール
9月25日（木）マンタ公演（プログラムB）／ホテル・オロ・ヴェルデ・コンヴェンションホール
9月27日（土）キト公演（プログラムB）／ルイ・アヨラ・ホール
9月30日（火）成田着

【参加メンバー】
笛：西川浩平
笛・尺八：砂川憲和
笙：真鍋尚之
三味線：山崎千鶴子
箏：山田明美
打楽器：望月太喜之丞
打楽器・指揮：田村拓男
ピアノ：奈良英子
舞台：古川尚人

【助成】文化庁・国際交流基金・（財）野村国際文化財団・（財）花王芸術・科学財団

日本音楽集団40周年記念作曲コンクール

Pro Musica Nipponia the 40th anniversary composition competition

日本音楽集団では、創立40周年を記念し作曲賞を創設します。募集要項の概要は次のとおりですが、詳細はチラシをご覧になるか、事務所へお問い合わせください。

- 応募作品 日本の伝統楽器のための4人から10人程度までの作品。楽器編成は日本音楽集団の楽器から選択すること。
- 審査員 西村朗・日本音楽集団
- 賞・賞金 第一位　50万円　第二位　20万円
- 応募締切り 2004年8月31日（当日消印有効）

日本音楽集団　最近の活動と今後のおもな予定

2003年

5月30日（金）埼玉県立鴻巣女子高等学校芸術鑑賞会　鴻巣市文化センタークレアこうのす
5月31日（土）日本音楽集団演奏会「伝統（にほん）の音 21世紀（いま）の音」　豊能町立ユーベルホール
6月 6日（金）伊勢崎「竹取物語」公演　伊勢崎市文化会館大ホール
6月11日（水）～13日（金）福井県学校巡回公演
6月19日（木）群馬県立太田西女子高等学校芸術鑑賞会　太田市社会教育総合センター
6月20日（金）川村学園音楽鑑賞会　川村学園講堂
7月 4日（金）三味線フェスティバル in 東京　東京都江戸開府400年事業
　　現代邦楽名曲集に「太棹協奏曲」で出演　東京芸術劇場小ホール
7月12日（土）第一生命ホールオープンハウス2003　第一生命ホール
8月26日（火）「研究会」団内コンサートVol.III　けやきホール
9月 3日（水）本荘市小学校芸術鑑賞教室　本荘市文化会館大ホール
9月12日（金）大田原市公演（ダンス・コンI他）　那須野が原ハーモニーホール
9月15日（月）アート・ミュージック・J・コンサート（五声のコンチェルティーノ他）　上越文化会館
9月19日（金）第172回定期演奏会
　　～クリティックス・プロジェクト・シリーズII　石田一志「祈りと踊り」～　津田ホール
9月21日（日）～30（火）第27次海外公演（エクアドル公演：グアヤキル・マンタ・キト）
9月30日（火）葛飾区立新宿小学校音楽鑑賞会　新宿小学校体育館
10月 2日（木）福井公演（五声のコンチェルティーノ他）　みくに文化未来館
10月 3日（金）新潟県頸城村公演（秋の一日他）　ユートピアくびき希望館
10月 7（火）～9（木）北九州市中学校公演　響ホール、ウェルとばた
10月10日（金）和楽器の調べ（ダンス・コンI他）　庄原市民会館
10月16日（木）奥多摩中学校合同音楽鑑賞会　古里中学校体育館
10月17日（金）サウンドフェスタいずみ～きらめく邦楽アンサンブル（二つの舞曲他）　いずみホール
10月22日（水）アウトリーチ・歌と二十絃箏と尺八のコンサート　中央区立明石小学校
11月 5日（水）大阪府立豊中高校音楽鑑賞会　池田市民会館アゼリアホール
11月15日（土）第173回定期演奏会
　　～音楽劇「オイディプス王」より音楽劇「砂漠に消えた王」～　第一生命ホール
11月19日（水）佐倉市中学校音楽鑑賞会　佐倉市民音楽ホール
11月23日（日）長岡市民音楽祭に出演（華やぎ、冬の一日他）　長岡リリックホール
11月24日（月）四季の響きよみがえる日本の音（秋の一日他）　愛知県芸術劇場コンサートホール
11月26日（水）常葉学園短期大学芸術鑑賞会（源氏音楽物語・巨火他）　静岡市民文化会館中ホール
12月 1日（月）～3日（水）邦楽鑑賞教室「邦楽アンサンブル」　丸亀市民会館
12月 6日（土）第18回くにたちファミリーコンサート音楽劇「ごんぎつね」と邦楽の夕べ　くにたち市民芸術小ホール
12月 7日（日）スーパー邦楽ライブV「大津絵幻想&巨火」　福岡博多座
12月17日（水）共立女子中学校芸術鑑賞会　共立女子学園講堂

2004年

1月17日、24日、31日／2月7日、14日、21日、28日／3月6日、13日、27日（各土曜日）
　　渋谷区伝統和楽器こども教室「三味線にチャレンジ!」開催
1月23日（金）第174回定期演奏会
　　～クリティックス・プロジェクト・シリーズII 石田一志「新春・産霊祭」～　津田ホール
1月25日（日）盛岡公演　盛岡市民文化ホール
5月28日（金）第175回定期演奏会～名曲選～　第一生命ホール

賛助会員へのお誘い

1999年10月、特定非営利活動法人日本音楽集団が発足したのを契機に、賛助会員を募集しています。多くの方々からの支援を仰ぎ、息の長い活動を目指したく、ご協力お願い申し上げます。　募集の詳細はチラシをご参照ください。

賛助会員（五十音順）

法人・・・・・
(株)全音楽譜出版社
(株)宮本卯之助商店
NPOトリトン・アーツ・ネットワーク

個人・・・・・
青柳　堯
新井克輔
飯塚絹子
飯吉正山
伊藤美恵子
今村厚子
今村文彦
大木紀史
大関富枝
太田颯衣
川壁　正
岸　彰則
小泉和子
後藤陽子
白水昭彦
杉田和繁
関　厚雄
田原たま
手塚愛子
藤山雅弘
中島靖子
中島康子
野原清子
浜田靖子
古川羽衣山
本田　実
水野正徳
森山俊雄
渡辺京子
渡辺ハル
渡辺治子
Andrew MacGregor

特定非営利活動法人
日本音楽集団

〒151-0073　東京都渋谷区笹塚3-17-1 滝沢ビル302　TEL03-3378-4741 FAX03-3376-2033
http://www.promusica.or.jp/　E-Mail office@promusica.or.jp

INTERNATIONAL MUSIC SERVICE
ims

アイ・エム・エス

●楽器リース●保管●移動●ステージ・スタッフ派遣
〒167-0043東京都杉並区上荻2-3-4 ゆうでんビル
PHONE.03-3397-2292
FAX.　03-3397-7728

箏

箏を愛するすべての人の繊細な感情を忠実に音に表現するために、
楽器の本質を追究した箏

十七絃箏
二十絃箏
二十五絃箏

Tokyo Kinkodo
時を超え心に残る音づくり

有限会社 琴光堂

〒152-0003東京都目黒区碑文谷2-19-15 TEL03(3792)8481　FAX03(3792)843
E-mail：kinkodo@v004 vaio ne jp